

テキスト

「世界経済史の方法と展開」入江節次郎藤原書店 2002 年

参考書

「世界経済史-世界資本主義とパクス・ブリタニカ」入江節次郎ミネルヴァ書房 1997 年

経済学の分野

☆原理論(理論)

→経済原論、経済学概論、計量経済学・・・

☆政策学

→経済政策論、公共経済学・・・

☆経済史

→経済史総論、日本経済史・・・

経済学の特徴

→比較的新しい学問

哲学、数学→いつから始まったか?解らない

アダム・スミス→経済学の父 or 経済学の祖

1776 年「国富論」(諸国民の富)から始まった!!

日本大学経済学部図書館にあったりする!!

なぜ、これ以前には経済学が成立しなかったか?

→アダム・スミスはもともと倫理学のひとだった。

この頃(18 世紀末～19 世紀始め)に、新しい時代がやってきた。

→現在にもつながっている

モノの値段はどのように決まるのか!

→モノを売ったり買ったりするからモノの値段が決まる

→自給自足か?商品の購入か?

経済史→経済の歴史じゃない。経済学が成立した以降の歴史。

→商品経済以降

生産と消費、供給と需要、がかつて一体となっていた→自給自足経済

エポックメイキングな出来事

→万物の商品化が起こった

ex.自然(土地・・・)、貨幣(外国為替・・・)、人間(労働力・・・)

ここから、商品経済(現在に続く)が始まった。←入江節次郎説だと 1820 年代から

主導的産業をもとに3つに時代区分
主導的産業とは→世界経済を牽引する産業

世界資本主義の・・・

第一段階→綿工業資本主義の時代(1820～1850年)

第二段階→鉄工業資本主義の時代(1850～1870年)

第三段階→重工業資本主義の時代(1870～1914年)

目的意識制約性(テキスト 34P)→客観性が大切

ヨーロッパにおいて商品経済がどのように根付いてきたか・・・

7～8世紀 牧畜経済から農耕経済へ

→荘園制(封建制)←自給自足的な農業

荘園という閉じた社会のなかで、自給自足生活をしていた。

→商品経済が少しずつ浸透していく

1096～1291年十字軍

中東地域からヨーロッパに産物が運ばれるようになる

12C～13C

古典荘園から純粹荘園へ

→地代(税)の徴収、物納から金納へ

13C頃の貿易圏

☆地中海貿易圏

北イタリア～中東

→銀、銅、毛織物

←香辛料

☆北方貿易圏

西ヨーロッパ～北ヨーロッパ

←銀、銅

→香辛料

中継地：シャンパーニュ地方

14C 封建制の「危機」

百年戦争(1335～1445年)

→英 VS 仏の王権争奪戦

→絶対王政に移行

15C 半ば「拡張の 16 世紀」

☆新大陸の発見

☆結婚年齢の低下

→人口(労働力)の増加

→農業の発展

→生活水準の向上

→結婚年齢の低下

当時の農業は今以上に労働集約的だったので

☆生活水準の向上で寿命も延びていく

商品経済がますます浸透

どのくらい人口が増加したのか?

15C → 17C

ex. 仏 : 1200 ~ 1300 万人 → 1900 万人 (1600)

スペイン : 500 万人弱 → 800 万人以上 (1590)

イングランド : 300 万人以下 → 450 万人 (1620)

西ヨーロッパでは人口の増加に農産物の生産が追いつかなくなった。

東ヨーロッパではさほど人口が増加しなかった。

→東ヨーロッパから穀物の輸入がなされるようになった。

→オランダ商人の介在

都市の発展

イタリア以西の人口 10 万人以上の都市

1550 年 : パリ

1600 年 : パリ、ロンドン、アムステルダム、セビリヤ、リスボン、アントウェルペン

都市は農産物を生産し得ない。

→都市の発展がますます商品経済を加速させる。

通貨量の増加

1545 年ポトシ銀山の発見

→スペイン王室を経由して欧州経済へ

一説には、毎年 20 万 kg 以上の銀がスペイン王室から流失したと言われる

貨幣改鑄(特にイギリス王室)も盛んに行われた

→通貨量の増加、商品経済に貢献

「危機の 17C」

☆人口の増加の圧力に農業が耐えられなくなる。

→収穫(限界生産性)遞減の法則

→悪循環が起こる

1600年～人口増加率 0.14%

☆通貨量の減少

1620年代：スペインに流入してくる銀が減少

→貿易の停滞

→北イタリア、フランドル、ボーヴェー、アミアンなどの毛織物も打撃を受ける

商品経済の成長にブレーキがかかる

イギリスが17Cの危機をうまく乗り切る